

# 令和2年度「英語指導力向上事業」～会津若松市立城西小学校～

## 現状の課題

- ・ 小学校4年間の学習内容の積み上げと中学校との接続を見据えた系統的な英語教育が必要である。
- ・ 完全実施により、専科以外も指導に関わる教員が増えたが、指導や評価に不安を持つ教員もいる。
- ・ 英語を必要と考える児童が多く、意欲的な児童もいる反面、話すことに抵抗感を持つ児童もいる。

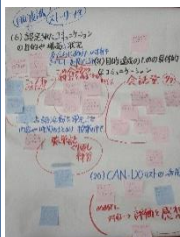


## 具体の取組の内容

### 取組(1) イングリッシュコンパスに基づいた授業づくり

- 外国語の指導力向上研修

- ① 中高学年各学年1人による外国語部会を組織
- ② 年3回の校内授業研究会の実施



### 取組(2) 既習事項を活用できるような言語活動の取り入れ方

- 表現を考える習慣作り

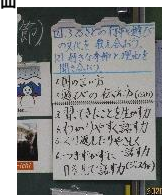
- ① 既習事項を生かした表現思考場面の設定
  - ・ 既習表現で使える表現
  - ・ 既習表現だけでは伝えきれない表現
- ② 既習事項を把持するための工夫
  - ・ 前学年のデジタルコンテンツの活用(歌・チャンツ・教材)
  - ・ 掲示による環境整備
  - ・ 各学期末の復習タイム確保



### 取組(3) 自己評価カードの活用と評価方法の活用

- 児童自身の達成感と教師の指導改善

- ① 教科書対応の小学校版CAN-DO作成と活用
- ② 達成目標の教師間・教師と児童間の共有
- ③ 年間学習計画CAN-DOカード
- ④ 全単元のCAN-DOカード(中学年版・高学年版)
- ⑤ 教科としての単元末テストによる評価
- ⑥ パフォーマンステストによる評価



## 成果①

- 英語部会を組織し、計3回の授業研究会を実施した。学校全体で外国語の授業作りについて研修することにより、これまで外国語を教えることに対して関わりが少なかった教員にも、良い研修の機会となった。
- 研究内容「イングリッシュコンパスに基づいた授業づくり」の柱にそって、提案授業・協議会を実施したことにより、その活用方法を共有することができた。
- 中学年では、ALT主導型から児童の実態をよく知っている担任主導型の授業に切り替えられ、日常的に担任主導で指導する学級が、0から4学級(6学級中)へと増えた。
- 5学年では研修として単元を通じた授業参観や授業研究を日常的に実施できたので、単元の構成やデジタル教材の活用方法等が担任もイメージできるようになった。

## 成果②

- 教科書に合わせた小学校版CAN-DOが完成し、学習内容の系統性が、いつでも誰でも確認できるようになった。これにより、指導者が替わっても、前年度の既習事項や次年度へのつながりが見えるようになった。
- 年間学習計画表・単元CAN-DOカードの改訂版が全単元分完成し、共通の評価補助資料とすることができた。
- 「書く・読む」技能はワーク類や単元テストで評価し、「話す・聞く」技能はALTとのパフォーマンステストで定期的に評価した。児童と評価基準を共有するために、ルーブリックを毎回提示したので、児童の自己評価が次時への意欲づけにもなっていた。
- 新出表現は、教師側から一方向的に与えるのではなく、どんな表現になるかを考える時間を作ってきた。学級全体での思考場面を作ることで、どのように考えていけばいいのかがわかり、即興的なやり取り場面でも役立っていた。

## 今後の課題・方向性

- 教科書単元の中には、生活科の体験学習(低学年)や総合的な学習の地域素材(中学年)が言語材料として生かされる学習があった。児童に、「話したい内容」を十分持たせるために、異学年も含めた横断的・総合的に関連付けが大切になってくる。今年度の実践は、来年度の教育計画にも位置付けて累積していきたい。
- 電子黒板やデジタルコンテンツ等の活用方法を3年間模索してきた結果、効果的な活用場面が明らかになってきた。今後は、一人一台のタブレットを授業内で効果的に活用できる場面も教師間で情報交換できるようにしていきたい。
- 1年次目・2年次目の小学校卒業段階の年間学習個人カードを中学校英語科教員に資料として提供した。今後も同一学区内の小中連携の在り方を具体的に考えていかなければならない。